

## 自由論叢

### 鱈 甲 鯧

今 村 博 子\*

私しや串本両浜育ち

色の黒いはごめんなれ

アラヨイシヨ, ヨーイシヨ

ヨイシヨ, ヨーイシヨ, ヨーイシヨ

紀伊半島の南端, 黒潮おどる大海原に細長く突き出た小さな海岸町, それが串本節の本場串本町である。

南国の誇の浜木綿の花, 絶ゆる事のない潮騒の音楽, 強い磯の香, 海辺を飾る数々の魚船, 魚網等郷愁の想は果てしなく拡がって行く。

この近海で獲れる魚は数々あるが, 私達が普通しびと呼んでいる鱈の大きなものが, 一番美味しいと云われている。これは全長一米余の巨大な魚である。

この魚を使つて母はよく「べつこ鯧」を作つてくれた。白い御飯の上に, ぴんと張りのある淡紅色のきらきら光つた魚の切身の美しさ, たゞ眺めているだけでも満足であつた。それを口の中へ入れた時の爽やかに歯ごたえのある感触, 思わずにつこりとなつたもので

\* 昭和三十年本学卒業生(平研究室)

ある。

田舎料理ではあるし, 家庭で作るものであるから板前さんの作つた様な一口に入りそうな上品なにぎりではない。たて・よこ 6×3cm 位の長方形のしびの切身が, それに相応しいにぎりの上にちよこんとのつかつていただけである。これがむしろにぎりに美味なのは, 海辺の者にだけ味へる魚の新鮮さにつきる様である。

しかし又, 今ではそれを食べる時の心の状態——故郷を離れた人間が故郷に帰り, しみじみとした気持で心尽の食卓に向かう時の恍惚感——が「べつこ鯧」の味を更に美味にしてくれている様に思う。

この鯧の名前の謂を私は全然知らないし, 又考えた事もなかつた。よく考えてみると「鱈甲」がつまつて「べつこ」になつた様に思える。そして「べつこ鯧」から受ける印象が, 「鱈甲鯧」に全く一致するのである。それで私はこの稿を書くにあたり, 鱈甲鯧と呼ぶことにした。

もう目前に帰省が迫っている。帰つたらこの鯧の謂を調べてみようと思つている。(完)

### 島 の 子 供 達

短食二ノ二 吉 川 勝 美

あらゆる報道機関を通じて, 食生活の改善とか生活の合理化, 栄養料理などという言葉が, 一般の主婦達に浸透しつつある喜ばしい現実とは云え, その裏にそうしたことは全く縁遠い人々のあることを忘れてはならない。

折にふれ, 学童給食や, 乳幼児, 青少年の栄養状態に関する話題が出る時, 私は, ちょうど二年前, 植物採集に行つた島の子供達の事を思い起こす。夏の烈しい太陽の下で, 裸で素足のまゝ, ぼろぼろの麦飯のおにぎりをほおばつていた子供。汚れた手でカンコロ

(甘藷を輪切りにして乾燥させ、それを炊いたもの)を握り、麦飯を食べている方の子を羨ましそうに見ている子供。又、浜木綿の花と海水浴場に惹き寄せられた見知らぬ人々の落して行つたキャラメルを、惜しそうに口へ入れたり出したりしている子供……。そしてその子供達の誰もが、申し合わせたように、瘦せた青黒い顔と、大きな下腹とを持つていた。

頂上迄丹念に耕やされた段々畑も、麦、芋、野菜のみ育ち、それはともすると野鼠の襲撃に会い、唯一の頼みとする沿岸漁業も、他村の漁業発展にその領域を狭められ、そこに住む人々の暗い表情には、何とかして生活を持続しなければならないという悲痛なほどの決心が、ありありと読みとれる。昔からの自給自足の生活が、何代も何代も受け継がれ、ようやく、米が配給されるようになった以外は、殆ど自給で間に合せているような有様である。食餌とは、食欲を満すものであると考え、満腹するために、いきおい麦、芋類が費やされるとは云え、これが彼等のあのエネルギーな労働を支えているというのであろうか。屋は農事に夜は漁業にと、一日十三時間から十八時間の仕事に役々と働きながら、尚ほ苦しい生活から脱けきれない彼等の現状なのである。

こうした環境の中に放任された島の子供達は、小学校へ入学するまで、遊び場はおろか、遊び道具、絵本さえも与えられず、毎日四方の海を眺め、山路を駆け疲れては木蔭に眠り、腹が空くと台所へ行き、小さい手を大きく広げて大きなおにぎりを作ることに骨折る。女の子は女の子なりに、弟や妹を背にくゞりつけられ、肩にくいこんでくる帯の痛さをがまんしながら台所の戸棚を漁る。彼等の父親や母親がそうであるように、子供達も、満腹することが最上の幸せなのだと思っている。明らかに栄養不足から来たと思われる顔色、標準にも満たない小さい子供達。栄養不足は、単に彼等の身体のみならず、知能をもむしばんで来ている。昨年頃からの事実が、愛媛大学教育学部学生の

調査によつて明るみに出されながら、それについて如何なる対策をも講じられていない事を嘆かわしく思いつつ、これから後の問題は、食物学を専攻する私達が解決しなければならないが、最も大きな背景となる社会問題の解決を、何に待つべきかと検討してみた。このバックボーンは簡単に片付けられるものではない。まして、無力な私に、何の解決の糸口がつかめよう。しかし、主婦の栄養的知識から、このような子供達の不幸を未然に防ぐことが出来ないものだろうか。このまゝでは、何故、島の子供達の健全な発育が望まれよう。魚は米の代価に市場へ運ばれ、蛋白質にさえも事欠く有様。もつと合理的な食生活が行える筈である。そして、それを指導援助することが、私達の使命なのだと考える。

昨年の夏休みに帰省した時、卒業したら、栄養士か教師になることを望んでいるが、大島の中学校の先生だつたらやりがいがあると友達の一人に言つたら、ランプ生活にあこがれていると爆笑されたが、来春に卒業を控え、真剣に卒業後の方針を考える時、島の子供達のことを脳裡に刻まれて離れ離れ。成長盛りの子供達の栄養障害が、子供を不幸にし、ひいては、島全体の不幸を招来せしめる事になる。子供ばかりでない。一日 3000~3500 Cal のエネルギー 摂取のため、米、麦甘藷と野菜、そしてわずかの魚類だけで済ませてよいものか。主婦達に栄養知識を移入し、彼等の食習慣の是正に導くことは、今後の私達の課題ではないかと思う。

こうして、今だに合理的な食生活からボイコットされている人々が、全国でどれほどあるものか。生活と直結している「食」の不幸は、生活全体の不幸である。「国民のすべてが、正しい栄養知識を持つて、健全な食生活を営むように、全国都々裏々迄、轟かせて下さい」と、私の中にある島の子供の乾燥した眼は、無言の中にこうつぶやく。(愛媛県出身)